

論 説



マクロ視点の品質工学

—視点のマクロから結果のイノベーションへ—

Robust Quality Engineering of Macro Viewpoint — From Macro Perspective to Innovation —

谷本 勲*

Isao Tanimoto

1. 「想定外」に思うこと

私が「マクロ視点の品質工学」を提案した第20回品質工学研究発表大会から数えて5年、多くの議論が展開されて来た。

私は第19回研究発表大会から実行委員長を拝命した。その大役を引き受けた最初の、一番大切なまとめの時期に東日本大震災に遭遇した。そこから通信手段、交通機関は混乱し、学会の活動に復帰できたのは5月に入ってからであった。この間実行委員の方々はもちろん、学会の皆さんにご迷惑をかけたものの、ご協力を受け大会は無事行われた。感謝の一言に尽きる。

19回大会に引き続き、20回大会の準備が始まった。当時津波の被害の膨大さ、原発事故の不透明な恐怖感などから、その責任回避とも受け止められる「想定外」という言葉がメディアにあふれた。そして防潮堤の高さが、盛り土の高さがうんぬん、議論が始まった。私はその議論に違和感を覚えた。その違和感を振り払ってくれたのが品質工学であった。問題の本質、原点に立ち返り課題設定が出来ているか、いまひとつ大きな視点で目的を捉え、手段を選択することが出来ているかだということである。ここにマクロ視点の原点がある。

私はこれまでに一度品質工学により自らの視点を改められたことがある。これがまさに私のマクロ視点の原点であり品質工学の原点であった。私の品質工学との出会いからそのマクロ視点の原点を振り返り、皆さんの参考になればと思いこの論説を書いて

いる。

2. 品質工学との出会い

私と品質工学との出会いは1998年である。当時私は事業部長として現業の第一線を預かっていた。担当事業部とは別に他の事業部を兼任することになり、その事業部へ初出勤した日のことであった。社員の一人から品質工学の勉強会をしたいと申し入れがあり、了解したことが品質工学との出会いであった。もしこれが初出勤の日でなければ、即座に品質工学はOEM生産の弊社には合わないと思われ拒否していたと思う。その後時間がある時、勉強会に出て後ろの方で傍聴していた。矢野宏先生がおいでになりご指導下さっていた。その話を聞いているうちに、品質工学は私が理解していたものと“ちょっと違っているな”と思い始めた。そこで品質工学の勉強会を申し出た者などのレクチャーを受けて、自分自身も少し品質工学の勉強をした。これが私の品質工学との初の出会いであった。

3. 2000年私が受けたミッション

2000年の9月ごろだったと思う。社長から本社に戻り技術担当・事業開発本部長として全社の技術部門を統括するよう指示があった。これからの技術開発、商品開発を指揮することが私のミッションと指示された。今まで現業部門の第一線でやってきた私は改めてスタッフとして全社の技術を指揮するに当たり、社長より3か月の余裕をもらい、改めて業界の置かれている状況を検討することとした。私は

* アルプス電気(株)